

# お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp  
Museum News

## Contents

- ・特別展「なるほど！ なっとく！ お札の文字のひみつ」より  
「額面と文言で見る日本のお札における文字の役割」  
展覧会追録
- ・秋の特集展「改元と歴代天皇～印刷局の逸品から～」より  
「すぎ入れ紙がつなぐ皇室とのご縁」

2019/12/1

Vol.

# 45





展覧会  
追録

令和元年度第1回特別展「なるほど! なっとく! お札の文字のひみつ」より  
額面と文言で見る日本のお札における文字の役割

令和元年度第1回特別展において、「なるほど! なっとく! お札の文字のひみつ」として、お札における文字の役割について紹介しました(図1)。夏休み期間の開催もあって、連日多くの方にご来館いただくことができました。

お札は、その公共性の高さから利便性・識別性・信頼性が求められますが、言語や数字に代表される「文字」は、情報の伝達が簡単であるという特性から、お札にとって利便性・識別性・信頼性の向上に欠かせない要素となっています。

そのことを示すべく、お札に書かれている文字の役割を「お札を使いやすくする」と「お札を信頼できるものにする」に分類して紹介をしました。展示では、現在発行されている日本のお札と世界の国々のお札との比較が中心でしたが、ここでは、これまで発行された日本のお札に注目し、特別展と同様に「お札を使いやすくする」と「お札を信頼できるものにする」役割を持つ文字について比較しその相違点について考えてみたいと思います。



図1 会場風景

お札の文字の役割その1 お札を使いやすくする

お札を使いやすくする役割を担う文字の中で、額面(金額)は代表的なものといえるでしょう。

世界には、公用語が複数あることからお札の額面を複数言語で表記している国、あるいは、独自の数字で表記している国がありますが、日本では大きく分けて漢数字、アラビア数字(算用数字)、そして、英語で書いてあるものが見られます(図2、図3)。

漢数字の表記は、江戸時代の藩札の頃からお札の額面を表すものとして使用されており、明治期に全国で統一したお札を使用することになっても変わらず使用されています。その表記の仕方は縦書きのものもあれば、右横書きのものもあります。その理由についてはおそらくデザイン性を加味したものと思われる。現在発行されているお札は左横書きですが、昭和24(1949)年、内閣官房長官より通達された「公用文作成の基準について(依命通達)」の中で、横書き表記に関しては一定の猶予期間を定めて「なるべく広い範囲にわたって左



図2(上) 日本銀行兌換券 甲100円(表)



図3(下) 日本銀行兌換券 甲100円(裏)

横書きとする」と定められたことから、昭和25年以降発行されたお札には左横書きが採用されています。

アラビア数字は、それ自体幕末から明治にかけて日本に入ってきたといわれています。明治4(1871)年発行の明治通宝(図4、図5)や明治6年発行の国立銀行紙幣(旧券)(図6)にはアラビア数字の表記がありますが、これらは外国で製造されたものです。明治10年発行のお札以降、お札を日本で製造するようになってからは、明治15年発行の改造紙幣を除いてアラビア数字が使用されています。図2、図3に見るように、表面は漢数字、裏面にはアラビア数字で表記をしているものが多くみられます。

また、輪郭模様の四隅に漢数字の篆書体やアラビア数字で額面を表記しているお札も多くあります(図7)。その形式は改造紙幣(明治14~16年発行)の時点ですでに始まっています。発行されたお札がすべてこの形式というわけではありませんが、多くのお札に採用され、昭和33年発行の日本銀行券C10000円まで続いています。現在発行されているお札よりも装飾が多く、デザインに溶け込むような形で額面が書かれているのが特徴的です。この輪郭模様でお札の重厚さを表しているとともに、模様の隅に数字を入れることで額面の把握が容易となり、使用する人が使いやすいようにしたデザインであるといえるでしょう。

額面を英語ですべて書き表しているものは、明治18年発行の日本銀行兌換銀券旧10円(TEN YEN)と明治22年発行の日本銀行兌換銀券改造1円(ONE YEN)(図8)などで、他は100YENのように額面はアラビア数字、単位は英語表記でYENと、混合表記しているお札がほとんどです。その後戦時中のお札ではYENの表記もなくなり、英語が見られなくなる時期がありますが、昭和21年発行の日本銀行券A5円(図9)で再登場し、現在のお札にも書き表されています。

最近発行されているお札の文字は、周りに装飾が少ないことや、漢数字についても書体が「大蔵隸書」に統一されたことなどからも、額面がはっきり読み取れることが意識されたように変わってきたといえるでしょう。



図4 明治通宝 金10円



図5 額面部分の拡大



図6 国立銀行紙幣(旧券) 2円(裏)



図7 日本銀行兌換券 甲5円



図8 日本銀行兌換銀券 改造1円(裏)



図9 日本銀行券 A5円(裏)

## お札の文字の役割その2 お札を信頼できるものにする

発行元や銘版(製造元)などの文字は、通貨としてのお札の信頼性を高めています。なかでも文言は、お札の信頼を高める大きな役割を果たしてきた文字といえるでしょう。歴代のお札と現在のお札を見比べると、文言は他の文字と比べて大きく変化してきました。

文言が日本のお札に本格的に入れられるようになったのは、明治6(1873)年発行の国立銀行紙幣(旧券)



図10 国立銀行紙幣(旧券) 2円

(図10)からです。アメリカで製造されたこのお札には、当時のアメリカの国法銀行券に入っている文言をそのまま日本語に翻訳して取り入れられました。お札を金属のお金と交換できることを表した支払文言や法律を根拠に発行されたお札であることを示した根拠文言、お札の偽造に関する罰則を表した罰則文言などが書かれています。

日本でお札を製造するようになると、明治18年発行の日本銀行兌換銀券<sup>だかん</sup>旧10円以降、明治33年発行の日本銀行兌換券甲100円までは罰則文言、根拠文言、支払文言とその英文文言の4つが書かれていました。これは当時の世界的な傾向で、まだお札に対する信頼が必ずしも確立できていなかったからであるといわれています。また甲シリーズでは、兌換制度が銀から金へと変更されたことに伴い、支払文言と英文文言の表記が改められました。日本円が国際的に認識されるよう、スペースを大きくとり、大きな英文文字で表記するデザインとなっていることも特徴です。

明治43年発行の日本銀行兌換券乙5円券以降は、根拠文言と罰則文言の表記が取りやめられ、支払文言と英文文言のみとなりました。昭和初期に発行されたお札からは、英文文言がなくなりました。そして、管理通貨制度への移行に伴い、昭和17(1942)年発行の日本銀行券い5円(図11)を最後に支払文言もなくなりました。

その後、文言については、あえてお札の上に文字で書き表すことはなくなり、現在発行されているお札にはどの文言も見られなくなりました。それは、お札の上に書き表さなくてもお札に対する信頼が確立できた結果といえるでしょう。



図11 日本銀行兌換券 い5円

## 日本のお札における文字の役割

「お札を使いやすくする」、「お札を信頼できるものにする」ことに寄与してきたお札の文字の役割は、近年広がりを見せています。現在発行されているお札でみれば、文字として表すだけでなく、触って額面が分かるよう識別マークが取り入れられるなど目の不自由な人に対してもお札を使いやすくする工夫がされています。2024年発行予定の新銀行券のデザインイメージにおいても、ユニバーサルデザインに配慮し、額面数字の大型化によって券種間の識別性を向上することをあげています。

現在お札そのものが信頼されるようになり、文言の表記はなくなりましたが、その一方でマイクロ文字のような、偽造防止技術によって真物であることを示し、信頼性を高めている文字が入れられるようになりました。マイクロ文字は平成5(1993)年の12月1日以降に発行されたお札から登場し、現行のお札にも採用され、お札の文字の役割はその様相を変えています。

(学芸員 山田 あさぎ)



# 改元と歴代天皇

## ～印刷局の逸品から～

10/1(火)～  
11/4(月・祝)



### 展覧会 追録

## 令和元年度秋の特集展「改元と歴代天皇～印刷局の逸品から～」より すき入れ紙がつなぐ皇室とのご縁

令和元年10月1日(火)から11月4日(月・祝)まで、秋の特集展「改元と歴代天皇～印刷局の逸品から～」を開催しました。

国立印刷局(以下、「印刷局」)は、明治4(1871)年の創設以来、お札や切手、官報、諸証券類の製造に携わっており、これらの重要製品に欠かせない高度な製紙・印刷技術の研究開発、実用化を続けています。印刷局の製品の中には、歴代の改元や天皇の即位等の皇室行事に関係の深い官報や記念切手があります。また、宮内庁からの受注品のほか、印刷局の独自技術を駆使した献納品や天皇の肖像画等の試作品もあります。



図1 特集展会場風景

本展では、令和改元を記念し、「改元」「天皇」をテーマに、印刷局150年の歴史の中で製作してきた特別な「逸品」を選びすぐってご紹介しました。

ここでは、印刷局の伝統技術・すき入れを駆使した製品と、皇室とのご縁についてご紹介します。

## 1 宮中に献納した「紙の芸術品」



図2 現在のお札のすかしの基礎  
日本銀行兌換銀券 改造1円(部分)  
明治22(1889)年

まもなく創立150年を迎える印刷局には、創業当初から受け継いできた重要な技術があります。その一つが、偽造防止効果が高く、独特の風格をもつすかし(すき入れ)技術です。印刷局では、創業当初から特に製紙事業に注力し、越前和紙の伝統技法を礎に独自の技法を編み出して、丈夫な紙質で精巧なすき入れを施した無二のお札用紙を開発、改良してきました(図2)。

お札に使われるのは「白黒すかし」という技法で、紙をすく際に厚さを変化させ、薄い部分(白すかし)と厚い部分(黒すかし)を組み合わせることで精巧な肖像を表現しています(図3)。お札のすかしは、明治20年以降、印刷局外での製造が禁止されており、140年にわたって受け継がれる門外不出の技法となっています。

このすかしの技術練磨と研究のために、印刷局で明治9年ごろから製造するようになったのが、美術的なすき入れ紙です。独特の風合いで花鳥や山水、肖像などを精巧に表現した「紙の芸術品」は、国内外の博覧会で高い評価を得ました。

明治9年、同12年には、明治天皇が印刷局の製紙工場(現在の王子工場)に行幸しています。こうしたご縁から、明治天皇は製紙事業に関心を寄せるとともに、特にすき入れ紙を愛好し、宮中の障子や欄間に貼って鑑賞したこと、時には新作の催促もあったことが伝わっています。



図3 現在のお札のすかし

当初製作していたすき入れ紙は、障子の格子ほどの小型サイズでしたが、次第に大型化し、最大のものでは900mm×1820mmに及ぶものもあったということです。明治天皇の在世中はすき入れ紙を献納し続け、印刷局ではこれを「献納紙」と呼びました。

昭和の初期までに、印刷局が製作したすき入れ紙は数百点に上りましたが、昭和20(1945)年4月の戦災によって、ほとんどが焼失してしまいました。これらは一般向けに販売しなかったため、現物を確認するには宮中に献納したものに頼るほかありません。そこで、昭和31年になって、宮内庁にその所在を照会することとなりました。

## 2 香淳皇后と印刷局

結果として、宮中に保管されていた献納紙は無事であったことが確認できました。幸運なことに、日本画がご趣味の皇后(香淳皇后)の進言もあって、戦災前に不燃倉庫へ移されたことから、難を逃れたとのことでした。そして、これら献納紙の中から、皇后ご自身がお選びになったものが印刷局に下賜されることとなりました。

下賜品は、主に明治・大正期に製作されたと考えられるすき入れ紙と、印刷局が明治10年代の一時期のみ製造した壁紙等で構成されています。これらは、当時の印刷局が展開した製紙事業と、草創期のすき入れ技術の水準やデザイン等を証明する現物資料であり、重要な事業記録となっています(図4～図8)。



図4 すき入れ紙「松に孔雀」



図5 同「松上鶴」



ひょうたん  
図6 同「瓢箪」



図7 同「藤花」



図8 壁紙「飛色地牡丹櫻模様」

こうしたやり取りの後、昭和42年には、昭和天皇・皇后が印刷局の製紙工場(現在の岡山工場)へ行幸啓し、お札用紙の製造工程や、特にすき入れ技術を興味深くご覧になったとのことで、当日の様子が残っています(図9)。本行幸啓を記念し、種々の製品とともに再びすき入れ紙も献納しました。



図9 お札のすき入れをご覧になる昭和天皇・皇后

### 3 『錦芳集』

香淳皇后は、日本画家の高取稚成、川合玉堂、前田青邨から指導を受け、お印の桃にちなむ「桃苑」の雅号で、皇居、那須や葉山の御用邸などで目にした動植物を題材に数々の作品を残しています。昭和42年には『桃苑画集』、同44年には『錦芳集』と、画集を出版するほどの腕前で、指導した前田青邨は、その画風を「堂々としていること、たっぷりとしていること、こせこせしていないこと、そのものの姿を描こうとして四つに組んでいらっしやること、いつでもこういうことを感じる。」と評しています。作品に押印される雅印も特徴的で(図10)、横山大観や、後に昭和天皇の御印も刻印した篆刻家中村蘭台が、皇居の吹上御苑の古木などを用いて篆刻したものということです。作品のうち、昭和41年に描かれた「海の彼方」は、昭和46年発行の天皇皇后両陛下御訪欧記念切手にも採用されています(図10)。

前述の通り、皇后のご配慮により貴重な資料を再び手にすることができた印刷局では、その御心に応えたいと考え、『錦芳集』の作品を元にすき入れ紙を製作し、皇后に献納することを決めました。画集には55点が収められていましたが、その中から25点を厳選し、昭和50年、仕上げの風合いにもこだわった手すき紙を完成させ、これを10セット献納しました(図11～図14)。

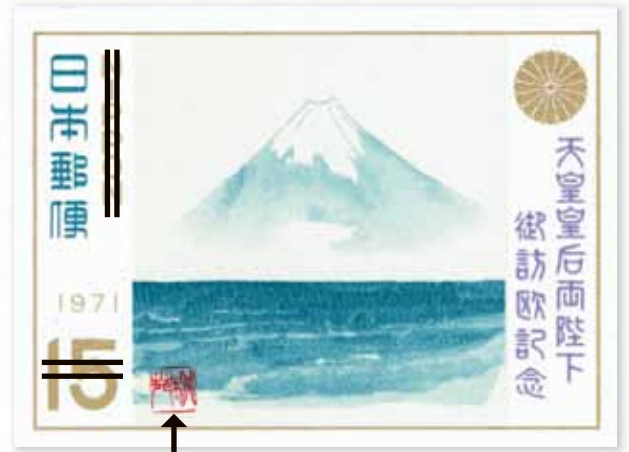


図10 「海の彼方」と雅印(拡大)  
天皇皇后両陛下御訪欧記念切手  
昭和46(1971)年



図12 同「後庭(西洋芙蓉)」



図13 同「葉山の磯にて(たこ)」



図11 すき入れ紙「海の彼方(富士山)」



図14 同「仔兎」

印刷局は、150年の歴史の中で、折にふれ当代の天皇や皇族の行幸啓を仰いでおり、これに応えるべく、印刷局ならではの技術の粋を集めた製品を献納してきました。また宮内庁からの依頼を受けて、天皇にまつわる歴史的な製品の製作も担ってきました。こうした歴史があるのも、印刷局が長年にわたって信頼に足る独自の技術を究め、これを保持し続けてきたからこそといえます。その一例が、明治天皇への献納を契機に、香淳皇后まで長きにわたってつながった「すき入れ紙のご縁」なのです。

(学芸員 土井 侑理子)



COMING SOON!  
**展覧会予告**

令和元年度 第2回特別展

# 乙百円 誕生の軌跡

日本人が初めて肖像をデザインしたお札

明治時代初期、日本のお札や切手は、お雇い外国人として来日したキョッソーネの尽力により近代化を遂げました。図案・原版彫刻・製版といった技術を伝え、日本のお札製造の主導者であったキョッソーネが印刷局を去った後、日本の技術者たちは自らの力でお札をつくる道を歩み始めます。

アメリカで技術<sup>けんさん</sup>を研鑽<sup>けんさん</sup>した大山助一<sup>おおよますけいち</sup>が伝えた技法<sup>も</sup>を弟子の森本茂雄<sup>もりもとしげお</sup>らが受け継ぎ、欧米の技術や様式を吸収しながら、印刷局は自らの技術を向上させ、昭和5(1930)年に乙百円が誕生しました。

当時最新の技術と日本独自の図柄を用いた乙百円は、初めて聖徳太子の肖像が採用されたお札としても知られますが、その肖像は日本人が初めてデザインしたものです。

本展では、お雇い外国人から学んだ技術を日本の技術者たちが自ら成熟させ、生粋のお札を生み出すまでの軌跡を同時代の海外のお札や関連資料と併せて紹介します。



日本人が初めて肖像をデザインしたお札  
 日本銀行兌換券 乙100円 昭和5(1930)年



大山助一が肖像を彫刻したお札  
 日本銀行兌換券 甲100円 明治33(1900)年

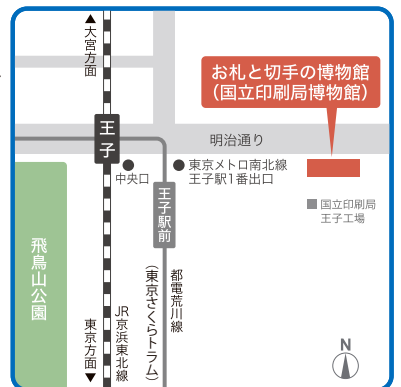
## ご利用案内

**入館無料**  
 開館時間：9:30-17:00  
 休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)  
 年末年始、臨時休館日  
 ※団体見学は、あらかじめお電話でご連絡ください。

独立行政法人 国立印刷局  
**お札と切手の博物館**  
 〒114-0002 東京都北区王子1-6-1  
 TEL.03-5390-5194  
<http://www.npb.go.jp/ja/museum/>

**交通**  
 JR京浜東北線「王子駅」(中央口)下車 徒歩3分  
 東京メトロ南北線「王子駅」(1番出口)下車 徒歩3分  
 都電荒川線(東京さくらトラム)「王子駅前」下車 徒歩3分  
 \*駐車場はありません。

**常設展**  
 偽造防止技術の歴史・印刷技術・製紙技術  
 偽造防止技術体験コーナー  
 重要文化財 スタンホープ印刷機  
 お札の移り変わり/世界のお札/  
 切手の移り変わり/世界の切手/  
 国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/  
 お札の芸術  
 \*特別展開催時は一部展示の変更があります。



発行:お札と切手の博物館(国立印刷局博物館)

発行日:令和元年12月1日 ©2019

本書掲載の内容を許可なく複製、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。